

# デジタル放送研究会第1回勉強会

平成16年11月18日

藤 吉：今日のテーマは、新潟豪雨の話が主になりますけれども、肝心の新潟放送局の放送部長に都合できょうは参加していただけませんでした。

一応、新潟放送局の話は、取りやめではなくてですね、延期だっていうことで、こちらは時期を改めて取り上げたいと思います。その前に新潟では地震も抱えてしまったものですから、地震の話のほうに関心が移っていますけれども、それもまた取り上げたいと思います。

実際まだデジタルを持ってない段階でやった放送と、デジタルという技術が加わった場合に、どう変わっていくだろうかということを考えていながら、研究をしようということでもあります。そういうことでは、今日からこの研究会はスタートするわけです。

今日初めて参加される方の自己紹介をお願いしますが、ほかの方はこの間やりましたので、今日初めて参加の方をお願いします。

天野教： 私です。TBS の総務部にいます天野といいます。よろしく願いいたします。総務の前には労務にいたのですけれども、その前 20 年ちょっと、ずっと報道局にいました。報道の最後に防災担当ということをやっております、特に地震対策をずーっと担当していました。特に、地震が発生した時の、放送の立ち上げについて社内の計画を立てたりいろんなことをしていました。その間に有珠山の噴火とか、三宅島だとかありまして、現地取材してきたり、あとスタッフの安全管理とか撤収、どちらかというロジスティックな分野をやっておりました。

デジタル放送っていうのは、われわれも今、商売になるのかなということで、いろいろ、私の違うセクションでやっております。ただ、ここに書きましたけども、デジタル放送はいろんな可能性があるということと、じゃあどういう情報を伝えて、どんなふうにするのかということについて、正直言ってなかなかイメージが浮かばないという問題が、一つあります。

もう一つは、どういう情報が一体あるのかなという、気象庁と長い間お付き合いしてまして、ずーっと疑問に思っていることがありまして、この機会に自分の中で疑問に思ってた部分が、デジタルということをきっかけにして、災害情報の伝達についていい方向が見つかればと考えています。

実は、最初どうしようかなと思ったんですけれども、後で中村さんに頼み込みましてですね、オブザーバでいいから入れてくれというふうをお願いしまして、末尾のほうで結構でございますというようなお願いでですね、末席に加えていただくことになりました。今日が初めてですけれども、どうぞよろしくお願い致します。

藤 吉： どうもありがとうございました。有馬さんは初めて。

有 馬： この間は台風だったんで。鹿児島島の南日本放送の有馬と申します。よろしく願いいたします。

鹿児島では11年前に8・6水害という大きな水害がありました。うちの会社も、8・6水害で川があふれて、局舎が水没したんですが、そのときにまで川キャンペーンという、川を大切にしようというキャンペーンをやっていました。8・6水害の翌日から今度は防災キャンペーンに変わって、川の防災対策っていうかですね、災害や防災に関する報道をいろいろやってきたんですけども。

それ以来、鹿児島っていうのは、NHKさんとうちが主なんですけれども、防災放送には力を入れてきていまして、その成果があって、ここ2年、連続でNHKさんと防災シンポジウムっていうのを共催させていただいて、学会も共同主催ということでやっております。

ほかの県はどうか分かんないですけども、年々やっぱり視聴者、特にローカル、地方は視聴者が、ものすごく細かい情報を求めてくると、何でそんなの僕らに聞くのというようなことまで電話で聞いてきたり、气象台に問い合わせてくださいとかいうようなことまで聞いたりですね、ともかく情報を求めているっていうのを、年々やってて実感しているところでございます。

その対処方法として、僕らロールテロップっていうか、画面の上にはずーっと交通情報なんかも、その度に情報出すんですけども、デジタルになった場合に、じゃあどういうふうな情報を、どういうふうに出して、あるいはそれを送送するためのデータを、どう入力するかとか、いろんな課題が出てくると思いながら、どうなるんだろうなど。便利にはなるけれども、ローカルの人手不足といいますか、何かどうしていけばうまく効率良く、しかも視聴者というか、ニーズに応えられるのかどうかっていうのが、まだ僕自身も全然イメージが見えていないところでして、今回学会のほうで、こういう研究会があるっていうことを聞いて、遠いので旅費がかかるということで、部長に行きたいんですけどって言ったら、行ってこいということになりましたので、月1回っていうことで、頑張ります。よろしくをお願いします。

藤 吉： どうもありがとうございました。

蔡： 神戸の人と防災未来センター、資料室の蔡と申します。名前だけはお聞きになったことがあるかもしれませんが、人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に伝えるという目的で、平成14年4月に誕生したセンターです。

この学会にもかわりがいろいろありまして、私どものセンター長の京大防災研の河田先生が学会の副会長ということで、会長の廣井先生のほうも上級研究員という形で、いろいろセンターのほうでご指導いただいております。

私は一応資料室ということになりまして、直接災害調査等をするセクションではありませんので、阪神・淡路大震災に関する図書を中心に、災害ですとか、防災ですとか、そういう関係の図書を集めている図書室のようなスペースで勤務

しております。やはりその中には、阪神・淡路以外の水害ですとか噴火等の資料もあります。

私自身が阪神・淡路大震災を神戸で体験しまして、すぐ避難所に入ったんですけども、やはりどうしても被災地にいる人間には情報がなかなか入って来なくて、むしろ今回でもそうですけれども、新潟の被災地の方が直接情報入らなくて、神戸ですとか東京にいる被災地外の皆さんのほうが、どうしても情報を知っているという状況が神戸でもありまして、こういう状況がもしかデジタル放送になったら、例えばどういう面で変わって、被災者自身も情報をキャッチできるようになるのかというような、そういった点に興味ありまして。一応私どもの資料室にも震災以降の災害情報関係の資料もある程度そろっておりますので、その辺で得た知識や、この研究会で得られた知識を、自分の勉強ということに情報を共有できると考えていますけれども、研究会の方にも何らかの形でフィードバックしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

藤 吉： ありがとうございます。大西さんも初めて。

大 西： 今日、初めてです。大西と申します。2004年2月末まで放送文化研究所におりまして、災害は1991年のリング台風以降、ずっと災害調査をやっています。過去の最も大きな災害であった阪神・淡路大震災の時には、急いで調査を行うようにという依頼が来て、被害者を中心に調査しました。

調査以外の仕事としては、放送の言葉のアクセントを決めた『日本語発音アクセント辞典』・『気象ハンドブック』、放送用語を選定して使い方を示した『ことばのハンドブック』を編集しています。たとえば避難勧告とか避難指示について、阪神・淡路大震災の後で「避難勧告と避難指示はどちらに緊急性があるか」を尋ねましたが、避難勧告と言う人が30%、避難指示が55%でした。ところが、去年（2003年）4月の調査では、避難勧告と答えた人が41%、避難指示と答えた人が44%で、ほぼ同数でした。これは「言葉の風化」というふうに私は思うんです。ですから、去年7月26日宮城県で、9月には十勝沖で大きな地震がありました。津波注意報、津波警報がでて津波が来るといっても、「自分のところは大丈夫だ」と勝手に考えて行動しない。怖さがだんだん、どこかへ行ってしまったという部分があるのかもしれないね。

避難勧告・指示だけではなて、ほかに「計画高水位」ということばも分かっている人は21%くらいですけども、「危険水位」と言い換えることによって分かりやすくなりました。古い話ですが、雲仙普賢岳噴火の後の調査で「火山情報の中で緊急性がある情報は何でしょうか」と訊いたら、「臨時火山情報」という答えが多かったのです。これも「緊急火山情報」に変わりました。こういうふうにすぐに分かる情報、とくに放送では見て聞いて分からなくてはいけない。そういう面では、分かりやすい情報の出し方を研究しているところです。デジタル放送時代

の「災害と放送」についても勉強させていただこうと思っています。よろしくお  
願い致します。

藤 吉： どうもありがとうございました。揃いましたか、今日ご出席の予定のみなさん。

天野篤： まだ、初めてのお二人来てないですね、三重県とうちの中部、名古屋と。

藤 吉： とっても分かりにくい場所ではありますよね。そういうことで、まだ来られる  
予定の方もおられますが、また来られましたら、一応最初の顔合わせってことで、  
ご挨拶していただきたいと思います。貴重な時間ですので早速、今日の議題に入り  
たいと思います。

それじゃあ簡単に、NHK のインターネットを使っただけのニュースの配信というのは、  
どんなふうにしてやってるのかということ、どの程度どういうときやってるかとい  
うお話から始めたいと思います。さまざまに新しいメディア展開に対する、ほ  
かのメディアからのご意見等もあって、NHK が無制限に新しいことを始めるとい  
うのは困るという批判を受けている、そういう状況にあって、選挙と、それから  
災害報道ということ以外は、こういう枠の中でやっております。

じゃあ今、始めたばかりですので、今来られたお二方に、自己紹介をしても  
らいましょうか。

天野篤： 今のお二人で最後です。予定全員そろいましたので。

藤 吉： 今、始めたところですので、今、来られた方、来られたばかりであれですけ  
れども、お二人の自己紹介、最初にお願いできますでしょうか。

水 上： はい。すみません。大変遅くなりまして申し訳ございませんでした。三重県庁  
防災対策室の水上当と申します。よろしくお願いいたします。

天野篤： できればですね、どういうことで、この会に志願をしたかみたいなところをで  
すね、お願いします。

水 上： わかりました、三重県ではですね、一応昨年9月9日から防災情報を、ホームペ  
ージとメールで配信するというサービスをやっております、そういったサービ  
スの一環で、たまたま中京圏よりも地上波デジタルの試験放送、始まってまし  
て、三重県は幸いにして、当時66あって、今はもう59なんです、すべての市  
町村で、地上波デジタルの受信できる環境が整ってます。そういった、多分WEB  
とメールだけだとですね、WEBなんか特にアクセス集中したときにですね、機械  
いくら増やしても仕方がないので、たくさんのメディアで情報提供すればですね、  
WEBにかたよることもないだろうし、災害時、何かの手段が一つ生き残ればです  
ね、情報得られるんじゃないかなと思って、一つの可能性として、地上波デジタ  
ルに興味を持っている次第でございます、簡単ではあります。田舎者で道に迷  
ってしまいました。大分ぐだぐだになって来てしまいました。申し訳ございません。  
よろしくお願いいたします。

藤 吉： ありがとうございました。同じようなことで、お願いできますか。

神 吉： アジア航測の神吉と申します。遅れてしまいまして申し訳ございません。2002年から、三重県の水上さんの部署の事業として、三重県防災情報提供サービスのお手伝いをさせていただいておりまして、現在、インターネットを利用した防災情報の配信を行っているのですが、その次の世代のサービスとして、地上波デジタル放送の活用を検討しております。災害情報学会の中で地上波デジタルのワーキンググループを行っているということで、全国的な動きについても把握しながら勉強させていただきたいと思ひまして、メンバーは確定していたのですが、後から無理をいって参加させていただきました。よろしくお願ひします。

藤 吉： どうもありがとうございました。お聞きのように、さまざま、思い、少しずつ違ったり、それから専門にする分野が随分違うという、そういう人たちの集まりですので、やってるうちにどうも自分の考えてたのと違うぞというようなことが、当然あると思ひますが、メンバーについては入るのも自由、出るのも自由っていうようなことで、元気の続く限り、期限内やってみようっていうことで走り始めましたので、一つよろしくお願ひします。

特に意見を聞かないっていうのじゃありませんが、メーリングリストを通じて、こんなことやってほしい、こんなことやってはどうかっていうような提案を、どんどん幹事会のほうに出していただければ、そういったものを元に、これからのことを考えていこうと思ひてます。みんな手探りの状態なものですから、ここにこういう人がいた、あの話を聞くといいよというようなことを推薦していただければ、そのような機会を作りたいと思ひております。

とりあえずは、そういうのが一番確かなやり方かなと思ひて、とりあえず3月までの候補を決めていますけれども、なかなか実際には難しいですね。さまざま、ノウハウみたいのがあるとか、競争があるとか、それから表だってお見せするっていうことができないってなものが、たくさんあるかと思うんですけども、そこをどうやって見させてもらうか、聞かせてもらうかっていうところが、これからの僕の仕事かなとは思ひますけれども、そんなつまり、手探りですけども、ご協力をお願いします。

今日のテーマに少し戻りますけれども、とりあえずここにインターネットが見られる状態で、NHKのインターネットでどういうニュースを提供してるかというのを、見ようと思ったんですけども、これが一番最初のページではないですね。ボタンが付いてないですね、これ。

羽 太： NHKの公開ホームページのトップページを開きますと、左上にニュース枠があります。お好みの項目をクリックしますと、画面が遷移します。

藤 吉： 何か確かボタンがあったと思ったら、ボタンが無いんで、どうしたかなと。これは最初の、NHKのホームページ、オンラインって書いてあるんですが、NHKのホームページの入り口はこれなんですか。

羽 太： はい。

藤 吉： ここに二つボタンが付いてますね。新潟県中越地震情報というのと、それから成立した法律、これは新しく今日か昨日か、この前、こういう特設のものがある。どっちがいいでしょう。新潟中越地震が特設してあるほかに、政治、経済、社会、国際、地域、スポーツというふうにジャンル別のものがある。特設でなくて、通常のラインナップとしては、上の枠の中に入ってるようなラインナップで提供してるっていう、そういうふうに考えればいいんですかね。

この中身はどうやって作られてるかっていう、若干企業秘密に属する話ですけども、私が見て聞いた感じでお話をしますと、そもそもはBSのデジタル放送用にニュースを作ってる。そのそっくり同じものが、このインターネットに流れてきている。そういうふうに理解していいですね。なるべく重複を避けるってことで、そういうことをやっているっていうことであります。

中身はどんなものかっていうのは、ご覧になったこともあるかとは思いますが、非常に簡単な部類の、非常に短いセンテンスで、ニュースのポイントを要約してあります。実際の作業はこの逆なんですよね。もうちょっと長いものがあって、さらにこの短いものにしてるっていう。元々の放送、表の放送では放送されてるニュースは、これよりもっと長いものなんです。通常1分、2分、3分、平均しますと1分何十秒というものが、平均のニュースの長さだと思いますけども、どうしても内容がややこしいとか、詳しく説明する必要があるということになると2分、3分というのものもあるかと思いますが、ニュースの中で3分かけてるっていうのは非常に長いものだと思うのですが、これで1分半ぐらいのものでしょかね。それを、さっきのように短くするっていうのは、簡単なようで実は大変難しいことなんです。だれにでもできることではないっていうのと、そういうやはり中身をちゃんと理解して要約するっていうことをしないと、違ったものになってしまう。例えば、文字数少なくすればいいってものじゃないってことで、実はこういう仕事をする人手を確保するというのが、非常に大変なんです。

なぜかっていうと、新しい事業だからってということで人員を増やし、予算を増やすっていうことが、できればいいんですけども、それができないっていうか、それはまあ努力、工夫が足りないからだろうって言われればそれまでなんですけれども、そういう中でやってきたっていう、これは民放さんの場合もあんまり変わらないんじゃないかなと思うんですが、これで新しい収入が得られるということになると、その収入の中でできる範囲でということができるんですが、NHKは長いこと受信料の値上げをしないということで頑張ってきたっていうこともあってですね、新しいことに手を広げるときに、非常に離れ業をやっているんですね。そういう意味で、こういう要約をするっていうような人材を、この間のぞいてびっくりしたんですが、私なんかと長いこと仕事をした、その長年の先輩たちがテ

ープルに付いて、仕事やってるといふ、そういう実情なんですね。その人たちがいなくなったら、この仕事だれがやるんだらうかという、非常に恐ろしい話なんですけど、後継者がいないという状況の中でやってます。

それは打ち明け話ですけど、ある意味では背伸びをした状態でやってます。しかもこのニュースが刻々と差し替えられていまして、そのために24時間勤務をやってるんですね。その元のオリジナルのニュースは、報道局が全国展開をしてる記者集団と、そこから送られてくるニュース原稿が元になっているわけですけども、それをこういう文字情報として提供するというときの加工に、非常に苦慮してるわけです。

映像についても、表の放送で流されたものを、そのまま流してるわけではなくて、ビデオと書いてあるのは、映像も見ることができるというニュースです。それを選ぶと映像も見ることができる。その映像も、もう1回加工することが必要になってきます、短く。

これからの問題は、地上波デジタルという形で、全国のローカル放送局が、デジタル放送のサービスをするときに、こういった情報サービスをどこがやるのかです。それは、それぞれの放送局がやることになるわけですね。それぞれの放送局も、東京と同じような事情を抱えていまして、もっと深刻なことには、こういうことを助けてくれるような、われわれの先輩のようなOBパワーが地方にはないため、こういうサービスができないですね。だからできるところと、できないところがあるということだと思います。そういう意味では、どこの地方放送局も、こんなことができるとは必ずしも考えられない。

かといってその一次情報を発信している、報道局傘下のニュースグループが、こういう文字情報の原稿まで書くようにと号令することも、なかなかできない。そういう意味で新しい事業展開に、予算も人員もかけないでやっていくということは、今がすでに限界なのかなという印象を、私は持ってるんですけどね、どんなものでしょうね。

逆に、ではどの程度の人がこういったものを利用してるのかというデータも、あとでお見せできるかと思いますが、それについてはCDでご覧に入れたいと思います。この中には重要データも入っている関係でこうなっています。

羽太： アクセス数の解析は、あとであらましを説明したいと思います。

藤吉： 中身だけですね。そうするとそれは、口頭で羽太さんに説明をしていただくしかないのかもしれませんが、ものすごい数になるんですね。ただ、必ずしもその、先ほど蔡さんのお話もありましたように、被災地の皆さんが必要とされているときに、被災地の皆さんにこういうものが届いてるかということを見ますと、必ずしもそうではない。そういうのが、アクセスのフォローをしてみても出てくるようですね。やっぱり東京の人が見てることが多い。それはある意味では過渡的なこと



で、将来にわたってもそうだとすることは、必ずしもないのかもしれませんが。これもっと詳しく知りたいとか、今、知りたいという時に、次のニュース時間まで待ってられないってなこともあるし、そういう意味でどういうラインナップになっているのかなとか、一つ一つの中身をどこまで見られるかなというようなニーズにこたえてくれるという点では役に立っていると思います。映像は、これ見られないんですね。

羽 太： リアルプレーヤーをインストールしないと再生できません。

藤 吉： このパソコンだけの問題かもしれない。どの程度、利用されているかということなんですけれども、これが特設ですよ。

羽 太： そうです。トップページに戻っていただいて、新潟県中越地震情報のボタンが特設ページとなります。

藤 吉： こういうときの、一番、世間の関心の大きいものを特設して、このぞけば集中的に見ることができるというように用意されている。しかもその中はさらに細分化されていて、最新情報、交通情報、関連情報、地方各局リンク、こんなふうに詳細な情報を用意してあるということでもあります。何がいいでしょうか。

羽 太： 最新情報を開いてみて下さい。

藤 吉： 今、最新情報、一番を見えています。その他に交通情報。これは、元のオリジナルの情報、どういうふうにして、入手しておられるのですか。

羽 太： これは、新潟局や社会部などから出稿された原稿を使っています。

藤 吉： やっぱり現場を見て。

羽 太： 災害情報の特設ページでは、出稿された原稿をそのまま使っています。

藤 吉： そのままを。

羽 太： はい。

藤 吉： ほかのメディアでは、こうした情報を有料でサービスしておられるところもあるわけで、そういうところに対して、NHK が無料で提供する情報が、そういう仕事の邪魔になってはいけないという、そういう配慮もあって、扱うジャンルを選挙の速報と災害情報というふうに自粛してるそうです。そういう形で競合しないように、やっているということです。NHK が将来にわたってこういう情報を無料でサービスするのかどうかというのは、保証の限りじゃないですけども。受信料という制度が、いつまで維持できるかということとの、にらみ合いみたいなところもあってですね、なにもかも受信料の中で賄うという前提で今のところは、動いてるということでもあります。

こういったデータ放送やインターネットの情報で入手される方のほうがメインになってしまったら、やっぱり考えなきゃいけないでしょうね。それでどの程度アクセスがあるかという話を、うまく私、表現できないんですけども、一つのニュース項目を、項目の数で数えるんですかね。ページビューというのは、何項

目見てくれたかっていう。

羽 太： ページビューは、あるページを1回開きますと、1回とカウントされます。

藤 吉： この交通情報を見てるっていうのとの関係は。

羽 太： それから最新情報をクリックして次のページを開いたり、交通情報から最新情報に戻ってページをみたりしますと、やはり1ページとしてカウントされます。ユーザーがアクセスをして、何ページ見たのかというのが、いわゆるページビューです。アクセスを考えるうえでは、このページビューが最も適した単位だということふうに言われております。

藤 吉： それで数えて、これ1回くらい数字を公表しますと、去年の11月衆議院選挙では、速報を始めた9日午後8時から翌日の午後8時までの24時間で、1,825万ページビューに達した。これが、そのときまでの一番多い数字だったんですね。それは実は更新されて、今年8月の台風10号の時に、お盆の帰省ラッシュのピークとも重なったこともあって、9日の24時間では1,300万、これ更新してないな。

羽 太： 台風10号は平成15年の8月ですね。

藤 吉： 今年の6月の台風6号、6月21日に2,375万ページになりました。実質、これだけの人が見たっていうことではなくて、1人が5ページ見たとすると、これを5で割ったぐらいの人がアクセスしたということなんですが、それでも400万、500万といった人がアクセスしたってことになるのかなっていう、そんなことで、恐るべき数の人が、こういう情報にアクセスしてるなっていうことは言えるかなと思います。

そういったものに、ちゃんと応じられるように、NHKのコンピュータも。初めからそうはなってなかったんですね。どんどんそのニーズを追っかけるようにして、いろんな工夫をしておられるということでしたか。どこでしたっけ、どっか外国のコンピュータ会社の。

羽 太： 今は、CDN、Contents Delivery Networkといわれる、国際的なサーバー会社も使っています。NHKのコンテンツをそこにアップロードしておいて、そこにアクセスをしていただくという仕掛けになっています。国際的なネットワークですので、例えば日本国内でアクセスが集中している場合は、アクセスしやすいサーバーに移っていくんですね。極端な話をしますと、日本でアクセスしても、外国にあるその会社のサーバーにアクセスすることもあるわけです。

藤 吉： 自分は知らないうちに、そういうところにつながってる。

羽 太： NHKではこうしたCDNを使うことでアクセスの集中に対応しています。

藤 吉： それで、問題の新潟福島豪雨のときには、どうだったのかということなんですけれども、このときには、こういう特設ボタンを用意して情報を流したわけです。このときの48万とか、こういうオーダーですね。ネットでのアクセスは48万。

携帯で16万、14万。やっぱりさっきの台風のとくに比べると、1桁少ないですね。

羽 太： 2桁少ないですね。

藤 吉： 2桁か。2,000万ですからね。これはどういうことなんですかね。やっぱり水害はその点は、ローカルの関心だったってことでしょうかね。全国的な関心ではなかった。一番多い時で、27日に114万。

東京で見えますと、東京ローカルが新潟のニュースをどんどんピックアップするので、東京の放送は新潟のことばかりやってるように見えてるんだけど、実は関東甲信越にしか流れていない。関西なんかで見ると、実はこういう新潟のは、そんなには流れてないということがあるんだけど、そういう意味で、全国的なアクセスはないですね。

同じようなことが起きても、関西で起きると東京は冷淡って言われるけれども、東京が冷淡なんではなくて、それぞれのエリアの主たる面倒見るところが面倒見ることになってる時間があって、その時間の枠は、同じはずなんですけどね。

何かあっても、やっぱり全国向けの放送と、近畿ブロック向けの放送というような時間枠が、全部足したものを東京で出してるんですが、何か東京は、東京や関東のことしかやっていない、近場のことしかやってないっていうような印象を、見る人は受けるのかなと思いますけれども。

羽 太： ちょっと補足しますと、先ほどの台風6号のときに、1日で2000万ページビューを超えました。これは、台風の影響が沖縄から始まって、九州、四国、中国、近畿、中部と移っていくことと関係しています。つまり、台風の進路に沿ってユーザーのアクセス数も増えていくわけです。一般論として、地域限定型の災害の場合には、アクセス数は限られてくると言えます。

藤 吉： 今の画面は新潟放送局が作っている、流しているインターネットに、こっから移っていったんですね。新潟放送局は、こういう細かい情報を流してます。例えば学校はどうなってるかとか、相談窓口はどうなってるかっていうような情報も、というようなことです。

ただ、先ほども言いましたように、こういう作業をするパワーを常時抱えているわけじゃないんですから、まさに災害の時の臨戦態勢ってということで、放送部門以外の人を動員して、こういう情報の入力等に当たらせている。またそれを、ずっと維持するっていうのは、ほかの放送局からの応援体制をするっていうことで、維持できるんですけども。そのパワーに限りがあるものですから、ローカルの放送局、通常のサービスということになると、ずっと薄まった情報しか流せないということだと思います。

こういうところが流す情報を、どこからどうやって入手するのかということと、それをこんな形で入力するのは、だれがどういうタイミングでやるのかということになりますと、各局の事情によって話が違ってきます。デジタル放送も各局が

出すようになった時に、こういうところにどういう人手を、それから情報入手手段としてどういったものを用意すればいいかといった問題を抱えているわけです。

羽 太： こういう形で、NHK がインターネット向けニュースを発信するようになったのは、今から 4 年前の 2000 年 12 月です。まだ始まって 4 年ということで、軌道に乗ってきてはいますけれども、まだまだ改善の余地が残っているというのが実感です。

藤 吉： 何か、ちょっと説明が、若干力不足でしたかね。それでは羽太さん、補足してください。

羽 太： 今、見ていただいたのは、NHK オンラインニュースの災害情報です。通常のニュースを発信しながら、大規模な災害や台風、あるいは国際的なテロ事件などに対応して特設ページを開設し、よりきめの細かい情報を流しているわけです。

新潟県の豪雨のときの対応についてですが、まず、豪雨の降り方と被害状況について、簡単にみていきたいと思います。

7 月 13 日は、午前 7 時すぎごろから雨が激しくなり、記録的短時間大雨情報が出ます。あるいは JR が運転を見合わせる、こういう影響も出始めます。

その後 9 時すぎには、三条市で自主避難の呼びかけがあり、10 時前には床上浸水の被害が出始めています。それから五泉市の能代川が 8 時すぎから越水し始めていて、11 時前には松村町で決壊し、12 時前には見附市、三条市、それから三島町、寺泊町などでおよそ 7000 世帯に避難勧告が出ます。7000 世帯を超える避難勧告は非常事態です。また、総務省によれば、堤防の決壊は新潟県内で 11 か所になりますが、ほぼ 1 時から 2 時前後に集中しています。

次に人的被害の状況についてみると、新潟県内では 13 日に 4 人の死亡が確認され、14 日に 5 人、15 日にも 5 人、16 日に 1 人の死亡が確認されます。日がたつにつれて、結果的に行方不明だった人が水死しているのが発見されたわけです。

こうしたことを考えますと、自治体はあちこちの河川が決壊した前後に、住民に何が起きていたのか、十分把握できていなかったことがうかがえます。

その自治体の動きをみてみます。まず、見附市ですが、実は亡くなった方は一人もいませんでした。見附市では 11 時に災害対策本部を設置し、その直後に 5,200 世帯に避難勧告を出します。市役所の災害対策本部から自治会長経由で、住民に戸別訪問したり、あるいは電話連絡したりして、避難勧告を伝えています。それで 12 時に、見附市での刈谷田川で越水が始まり、総務省によれば午後 2 時 20 分に決壊しました。見附市に限って言いますと決壊する 3 時間前には、避難勧告が 5,200 世帯に出され、結果的に犠牲者がいなかったということです。

それから中之島町は、3 人の方が亡くなっていますけれども、12 時 20 分に災害対策本部を設置し、12 時 40 分に避難勧告を出していますね。その 20 分後の午後 1 時には決壊しております。また、避難勧告は広報車による伝達だったというこ

とで、大雨の中で本当に伝わったのかどうか、大変疑問です。

それから三条市の場合は、9人の方が亡くなっています。午前9時に災害対策本部を設置し、11時40分に、市民の3分の1に当たる1万世帯あまりに、避難勧告を出していますね。三条市の場合ですと、五十嵐川左岸が午後1時10分ごろ決壊しています。三条市の場合は、災害対策本部から自治会長経由で避難呼びかけをしたということですが、結果的に9人の方が亡くなっています。

このように激しい雨が降り続き、被害が広がる中で、私たちはまず、項目ニュースとして、記録的短時間大雨情報が出たことや新潟・福島大雨情報を伝えました。そして、避難勧告が相次ぐなど、どうやらひどい被害が予測され始める正午すぎ、新潟豪雨に関する特設のページを開設して、詳しい情報を伝え始めました。

こうして振り返ってみると、問題点として、3点あるように思います。

1点目は、情報が十分伝えられたかということです。ニュースの項目数や特設ページの開設時間などに、課題を残したと思います。

2点目は、自治体の現状把握が十分だったのかという点です。異常な雨に、直ちに災害対策本部を設置し、避難勧告を直接住民に伝え、犠牲者が出なかった見附市の対応と犠牲者が出た自治体の対応を比較すると、自治体の情報収集能力や状況判断が適切だったかどうかという点です。

最後の3点目は、避難情報の伝え方の問題です。私どもでは、避難情報は、原稿が出れば直ちに伝えます。それが間に合ったのか、間に合わなかったのかという問題はありますが、自治体の避難情報の出し方と伝え方、それに自治体とマスコミとの連携がうまくいったのかという面も重要で、多角的に検証しなければいけないと思います。

それからアクセスの面から、どういうことが言えるのかという点です。先ほど申し上げましたが、局地的な災害では、必ずしもアクセス数は大きく伸びません。ただ必要な人に必要な情報が届いていたのだろうかという視点で、何か問題点が見えてこないか調べてみました。

NHKのニュースへのアクセス数は、豪雨のあった13日と前日でほぼ同じでした。しかし、深刻な事態が判明し始める午後から急激に増えています。それから、新潟局で制作しているページに、直接アクセスする方もいます。13日のアクセス数は、通常の5倍に増えています。見過ごせないのが、時間的なアクセス数の比較です。午前7時台で通常時の2倍、8時、9時台で5倍、10時台では何と15倍に増えているんですね。新潟のページにアクセスをした人は基本的に新潟県内の人だと思うんです。つまり、新潟では、雨が激しくなり始めた午前7時台から情報を求めるユーザーが急激に増え始めたということです。数量的には決して多くはありませんが、それに十分応えることができたのかという面から検討する必要があるように思います。

それから、私どものログ解析では年齢は分かりません。でもご承知のように、新潟の豪雨で亡くなった方は、大半の方がお年寄りでした。こういう方たちの中に、インターネットで情報を収集した人がどれだけいたのか、考えさせられます。

デジタル社会の情報の格差、つまりデジタルデバイドは、一般に先進国と開発途上国の間で問題とされています。しかし、人の生命、財産にかかわる防災情報については、国内でも都市部と農村部、若者と高齢者の間のデジタルデバイドが大きな課題の一つになると思っています。

藤 吉： よろしいでしょうか。いろいろ質問もあるかと思いますが、もうお一方、田代さんのお話を聞きたいと思います。

田 代： はい。私、日本気象協会の田代と申します。現在 NHK の朝の「おはよう日本」という番組を担当しております、この新潟豪雨のときは、非常によく覚えています。担当しているのが5時から7時までの間、ちょうど新潟で雨が降り始めた、まだ激しくなるまではいかない、直前くらいの状況でした。実際、私も放送しているときは、こんな被害になるとは思わずに、家に帰って、昼過ぎにテレビをつけてびっくりしました。

後から振り返ると、もう大変な大雨になっているという状況なんですけれども、先ほど話もありましたけれども、台風と非常に大きく違うのは、2、3日前からやってくる台風とは違い、今回の大雨は梅雨前線の雨。7月の梅雨前線の雨というのは、大雨をもたらすことが多い気圧配置ではあるんですけれども、なかなかそれが直前になるまで、どれだけ大雨になるというのは予想できない、難しい現象ではあるということ、一つ頭に入れておいていただきたいというのがあります。

あと、ちょうど豪雨があったのは7月13日、そのころどういう天気だったかというのを思い返してみると、雨というよりも、むしろ暑さにみんな関心がいていた、つまり大雨とは全然違うところに関心がしていました。例えば前の1週間では熱中症で倒れるという方が続出していました。さらにこの豪雨があった7月13日の直前、7月11日、日曜日に九州、四国中国地方で梅雨明けしているんですね。ということは、それ以外の地方も、じゃあそろそろ梅雨明けかという、雨とは違うところに関心事があるという日でありました。しかもこの13日というのは、実は関東地方のあたりで梅雨明けするんじゃないかという関心事があるの中で、まだ朝の段階ではまだそれほど強い雨は降っていなかったという状況も加えて頭に入れていただいて、まずは5時台の放送を見ていただきたいと思います。

( ビデオ再生 )

というわけで、このときはまださほど新潟で強い雨が降り出していないぞと

いうところもありまして、イメージとしては、暑さの話が中心です。東京の最高気温の予想が 35 度でしたし、個人的にも、強い雨という表現はしているんですけども、すごい災害になるというイメージは、まだ持っていないという状況でした。

ここは早送りします。長いので。この辺はほとんど暑さの話をしています。

( ビデオ再生 )

一応強い雨について触れてはいますが、まだちょっと漠然としているかな。雨量としては 1 時間に 15 ミリ以上ということで、少し強い雨が降り出しているというところではあります。実は、このとき 7 月 13 日ということで、オリンピックのちょうど 1 ヶ月前ということで、そんなネタもやってます。

ちょっとこのあたりは、先ほどとほとんど一緒なので、割愛します。

今、全国放送なんですけど、このあと 56 分から関東・甲信越地方の気象情報がありまして、1 日のうちで、ここが初めてローカルの、新潟だけのローカルの情報の天気予報が始まる時間帯ではあります。

( ビデオ再生 )

後から振り返れば、ちょっと危険な雨雲がかかり始めているという状況ですが、実はまだこの時間は、警報は出ていない状況です。注意報ですね、大雨注意報。

( ビデオ再生 )

この辺でちょっとまずいな、というふうに個人的には思っていて、6 時台から多少表現を変えています。

( ビデオ再生 )

このくらいの時間から 1 時間に 30 ミリ以上の雨が降っています。

( ビデオ再生 )

実はまだ、この時間、警報は出ていません。

( ビデオ再生 )

これは全国放送なので、一応広い範囲の方から見ると、やっぱり暑さはどうなるか気になります。ただ大雨の話も、ちょっと 6 時台からは、どうにかして入れたいという気持ちが強くなってきました。そこで、梅雨末期は夏空と梅雨末期の大雨が同居するという表現で、どうにか両方に興味を持ってもらうような言い方に変えています。

( ビデオ再生 )

ここは 6 時 55 分。私の担当ではないんですけども、実はこの前、6 時 29 分に大雨洪水警報が新潟県に出ています。先ほどの天気予報のあと、6 時 25 分から関東甲信越地方のニュースが入るんですけども、そこでもアナウンサーの方が読む天気予報をやっていて、警報があればそこでお伝えします。ところ

が、ちょっと録画はしていないんですけども、その時間には警報の放送はぎりぎり間に合わなかったという記憶があります。

( ビデオ再生 )

ここは、7時前の天気予報で、視聴率を見ると、1日の中でもかなり視聴率の高い天気予報です。

( ビデオ再生 )

この時間で、もう警報が出ている。

( ビデオ再生 )

最後に7時台に。

( ビデオ再生 )

というわけで、「おはよう日本」の中でやっている天気予報は、大体このくらいの感じだったんですが、実際には、この時間から激しい雨が降り始めて、記録的短時間情報というのが8時台に初めて出たんですね。1時間に80ミリ以上という、1時間でも災害が出る恐れのあるといわれるような雨の降り方というのは、結局この番組が終わった後なんですね、8時台。なので、恐らくそれが番組中に、それがあと1時間とか2時間早く降ってれば、それをもしかしたらニュースで取り上げた可能性もあるというのが、一つあるということです。

あとはですね、これをやって感じたことは、まず一つは、台風なんかと違って、非常に局地的な雨というのを、全国放送の中でどれだけ大きくクローズアップするかという問題があって、なかなかそこはやはり限界もあるという感じも強くあります。

あともう一つは、早い段階、6時半くらいに警報は出ています。確かに警報というのは警戒を要する、警戒を呼びかける情報ではあるんですけども、果たしてその警戒が本当にすごい、大変な状況になる警報なのか、あるいはそこまでいかないものかというのは、どこまで伝えられるかというのは、なかなかこういったテレビでは難しい。そういったレベルの問題、さらに細かいレベルの問題、そして局地的な問題も両方併せて、デジタル放送の可能性や活躍する場があるのかなという気はしております。

一応、問題提起といいますか、そのときの状況を思い出していただくというのも含めて、放送を見ていただきました。何かご意見や、あそこの放送、もっとこうすればよかったんじゃないかなどあれば、お話しただければなと思っています。はい。

鷹野： 今の放送が新潟のほうでも流れているんですか。

田代： 流れてます。つまり、今私が放送したやつは、すべて流れています。はい。

鷹野： 新潟の人も、今の状況はテレビで。

田代： 今の。そうですね。先ほどのお話では、7時台くらいから、ニュースでも扱



うようになったという。

蔡：この警報とか、注意報とかってというのは、気象庁のほうから、放送局とか気象協会とかに流れていくという感じですか。

田代：そうです。出たときには、NHKにはすぐその情報は入ってきますね。

蔡：大体、地震とかだったら大体3分か5分くらいに、テロップで流れる感じだと思うんですけど、気象の警報とかだと、大体、流れてどれくらいたって画面に反映されるという感じですか。

羽太：気象警報のスーパーはすぐに出ます。

田代：リアルタイムで。

羽太：ほぼリアルタイムといってよいと思います。ですから、新潟では、6時29分に大雨洪水警報が出ていますが、6時半過ぎには、新潟局のローカルテレビに大雨洪水警報のスーパーが出ているはずですよ。

蔡：でも、ローカルでほぼリアルタイムで、テロップを流して、その気象情報の時間帯には具体的なかたち、2段構えみたいな感じで。

田代：そうですね。警報に関しては、ローカルの天気予報の中では必ずやります。

藤吉：ありがとうございます。時間も来てしまって予定した議題を、全部埋めるわけにはいかないんですけども、若干時間が遅れていますけれども、質疑応答の時間、少し取りたいと思います。この機会に話しておきたいことはありませんか。

デジタルだったらあんなことができたかな、というようなことはないでしょう。もうちょっと新潟のことを時間かけてやるような。電波を分けて。東京から新潟ローカルの気象情報を流すなどできるようになるといいですね。

田代：そうですね。まだ状況としては、そこまでやるという雰囲気ではなかったという。

藤吉：しかも、番組がその前に終わってしまっただけで、いかにも仕様がないうえ、急激な気象の変化が起きる前に、自宅にいてテレビを見ている時間が大体ピークを越えようということですね。

田代：そうですね。

藤吉：そういうテレビをみんなが見ていない時間帯が、まさに災害の起きている時間だったということなんでしょうね。これデジタルだったらもっと違った放送ができたろうかということになりますがその辺りはどうですか。

田代：ただ一つは、デジタルだったにしろ、まずそのデジタルを見てくれるかどうかというのが、やはり大きい。

藤吉：出かけてしまうという。

田代：出かけるかですね、やっぱり自分に関係ないところは見ないわけですから、そういう方たちにどうやってお伝えするのか。内容を議論する前に、まずアク

セスしてもらおう、そこをどうしたらいいんだろう。

大 西： いいでしょうか。例えば過去のデータで、新潟の三条市、このあたりで警報が出た回数とか、1年間にどのくらい出るかとか、それによって出る回数が多いか少ないかによって、関心が随分違うところはあるんですね。1998年に栃木県的那須で大雨が降りましたが、地元の人には警報が出たり、記録的短時間大雨情報雨が出たりすると、「ああ、雨は峠を越したって、みんな思いました」と言うんですよ。こういう認識だとすると、大雨の注意報、警報などの情報を出しても住民に伝わっていないことになるのですね。そうするとこの地域では、過去にどのくらいの回数で、警報が出ていたのかなというふうに思うんですけどね。それはどうでしょう。

田 代： そうですね。ちょっとこれは即答できないんですけども、一つの方法としては、今、どうしても一つの現象ごとに、こういうふうにいるいろいろ伝えていきます。けれども、これから逆に、ポイントポイントで、例えば同じ雨の降り方でも、例えばあの新潟の雨の降り方でも、四国の高知の山沿いであの降り方をしたら、どれだけの災害になるかという、恐らくあそこまで人的な災害にはならないと思いますね。だから場所によって、恐らく全国、場所によって、まずその被害が出る閾値というのが大きく違うと思うんですよ。その閾値がどのくらいかというのを、あらかじめそういうのは集めて準備しておく。

テレビは基本的には全国の皆さんに放送するという形になっているので、そのポイントの方に、例えば三条市では過去200ミリ以上の雨が何回降ったかなど、なかなかそこまではお伝えすることができません。大きな被害が出てしまったら別ですけども、そういったところはあらかじめ情報をストックしておくような、常に見られる形が、デジタル放送では可能だと思います。

大 西： そうですね。それはありますね。

有 馬： 僕、ちょっとイメージがわからないんですけども、うちは会社に気象予報士がいるもんですから、うち独自でやっているんですけども、関東甲信越っていうのは広いじゃないですか。東京にいる中で、新潟の、今回五つ新潟全部出ているんですけども、ある一つだけパッとすごい警報が出たときに、イメージができるものなんですか、東京にいて、どんな降り方が。

田 代： 実はイメージしようと努力はするんですけども、なかなかやはり難しい。特に首都圏はローカル放送と言いながら、関東甲信越という非常に広い、非常に大ざっぱな情報になっているというのも、実はあるんですけども。

有 馬： そうなってくるとやっぱりローカルの局が、伝え方が、やっぱり一番カギに、今回のものですね。だからローカルで天気やってますけれども、僕らも他局のやつを見たりしますけれども。やっぱり警報、注意報の画面、今も、警報があったら言うっていう形になっているんですけども、いつも警報、注意報の画面

は出るんですよ。その中で色が黄色から赤に変わっているというだけの伝え方になっちゃってたりするんじゃないかなと、僕は見てて思うんですよ。

だから、うちは警報が出たら、出たらというよりも、出そうなときからもうすでに気象予報士が解説を始めますので、他局を見てると、いつもの天気と変わってるか変わってないかが分からない。だから視聴者の人も分からないというか、いつもと変わらないんじゃないかなという。だから伝え方の部分だと思うんですけども。その辺がやっぱり一番難しいんでしょうけど。

田代： そうですね。人間が出て、口調とかイメージとかでいって、本当に今回の雨は大変なことになるっていうようなイメージで、しゃべりながらとかだとできるんですが、文字とかで、それを伝えるっていうのは、なかなか、またちょっと難しい。

藤吉： よくあれで、新潟新潟って言葉を何度も何度も言っておられるけど、新潟に絞られてますよね。

田代： 何かちょっと福島とか、周辺とか言いながら。

天野教： すみません、いいですか。その7時半からのローカルの枠の中で、どういふふうな扱いをしたかだというのはちょっと聞いてみたいと思うんですね。それで、今のはすごくメッシュが大きいわけじゃないですか。今の気象情報は、これは僕なんかよりも、有馬さんのほうがよっぽどご存じだと思うんですけども、メッシュがもう1キロになってるのかな。5キロでしたっけ。

有馬： いや、そこまでは。

天野教： 最初20キロとか10キロだった、10キロメッシュだったんですかね。だんだんメッシュが、いわゆるアメダスのメッシュが細くなったわけですよ。ですから降り方の現状を見るというのは、ものすごく今もっと気象庁の方に聞いたほうが、僕より早いんですけど、進んでいると思うんで、そういうものを見ながら気象予報士さんはやるわけですよ。そうするとローカルで詳しい方がいれば、それはかなり分かるというのか。機械が進んでいて、これはどういう降り方をしていくかというの、今は予想が付くわけですよ。そういうシステムもありますから。

： TBSさんもやってます。

天野教： ただやっぱりTBSの場合もやはり東京が中心ですので、そういうときは、例えば今、この状況は、何年間で、ここ数年間で一番土砂災害が起こりやすい状況なんだみたいな表現を使って、そういう土砂災害の危険地域っていうのは山間部に決まっていますから、そういうような注意を促すというようなことはしています。洪水ということになると、実はなかなか洪水警報くらいなもので、洪水っていうのは、山で降ったものが河口であふれたりするから、よく分からないんですね。洪水っていうものについて僕は気象予報士さんが警報が出まし

たという放送は聞くのですが、何か話したっていうこと、聞いたことないんですね。

土砂災害とか何かについては、そういう、例えばそういうメッシュの赤いのが、これがこれからどうやって動いていくと、ここでこのくらいの雨が予想されるんで、土砂災害の危険性がありますよっていうようなことは言ってますよね。

あと、僕らが都心部なんかで注意するのは、時々、短時間の雨のかたまりが、やはりメッシュで出てくるわけですね。それは注意報で、注意報の段階だと、ほとんど放送なんかしません。関東はもう、予報の箇所が多いので、面倒くさいんです。なぜかっていうと、注意報だとすぐ消えちゃうんで、注意報が出ました、注意報もう消えましたなんていう面倒くさいスーパー速報しているのが嫌なんで、警報が出たときしか出しません。そういうルールで、そういうふうに決めちゃったんですけど。警報が出ますと、警報が出ました、と。警報が消えたっていうのもやらないんですよ。それ出してくれてっていうふうに言われたんで、今出してるのかもしれないですね。僕がやってるときは、警報が出ても、出た時だけはやりました。ただ警報が解除されましたっていう解除報をどうするかっていうのがあってね、面倒くさいなと思って、それは最初出さなかったですね。今は、解除されましたって多分出ていると思うんですけど。

そういうときは、もう関東一円のアメダスの状況のメッシュを、ずっと画面を、われわれ見てまして、放送には、天気予報のところには使いますけれども、ずっとあとは監視していて、ひどくなりそうだなと思えば、その辺で水害なんか洪水があるのかもしれないというようなことを考える。起きたら取材に行くということだったと思います。

じゃあデジタルということになると、どういうことかっていうと、これはもう今お話しするのは数年前の話で、それは一番先どなたかがお話になったように、そういったメッシュの情報、BS 放送が始まりまして、画面が埋まらないわけですよ、簡単に言っちゃうと、画面が、広いものですから。そこに何か入れなきゃいけないというんで、天気予報入れるかということになりました。天気図をまず入れてみようかと。あるいは、そういうアメダスの情報を入れてみようか。あるいは交通情報を入れてみようかというようなことで、情報を、そういう画面を埋めるためのツールとして、入れ始めたっていうのが初めだったと思うんですね。今は、僕は今はデジタルの放送を自分でも使っていますが、当時に比べて、気象情報を引き出すことは簡単にできるでしょう。

もちろんそういうことと、情報は確かにあるんだけど、それはそれが大変な警報が出ていて大変な情報で、それが自分の身の危険になるような話なのかどうかということが、分からないですね。警報が出ても分からない。結局、やは

りそれは、何かのまた別の、行政が逃げろと言わなきゃダメなのだとか、それをどうキャッチするのが問題なのかとか、そういうような話だと思うんですけど。

気象庁の方にもう少し詳しくお話いただければいいかと思うんですが、かなり情報というのは、そういう意味では出てきていると思うんですね。ただまだ、雨についてですよ。ただまだ、もっと出てくる可能性はあるし、もっと予想というものでいえば、もっと出てもいいのかなとは思いますが、実際は出てるのではないかなとは思いますが。

洪水については、新潟の洪水についてずっと南日本さんの話で、いつもそういう場所だから、洪水ってものがあり得るんだという、日ごろから危険性を感じているというところと、そういう意識の差だということになってしまうと、これもなかなか難しくなっちゃうんですけどね。

洪水ってことについて、例えば那須の洪水とか、那須のときは、那珂川まで洪水になったんです。それはもう起きてからですね。あれがあんなになるとは思ってなかった。

藤 吉： 時間が来たようですが、桜井さん、何か、黙って帰るわけにはいかないと思うんですけども。

桜 井： 気象庁の桜井といいますけれども、何を言えばいいかな。今回の新潟福島の高雨とか、それから福井の高雨も、さっき田代さんも何度もおっしゃっていたみたいに、やっぱりどのくらい前にあそこまでのことが起こるのか分かったのかというと、非常に厳しい、正直言うと分からなかったものだと思います。そういう中で、新潟の気象台が6時に警報を出しているのは、あのような現象にしては適切に対応できたのではないかと思います。平成10年にも、あのときは新潟の市内だったんですけども、新潟でやっぱり豪雨があって、かなり浸水したりってということがありました。当時も新潟の気象台にいた友人と今回の豪雨の後ちょっと話をしたときに、これは、もしかしたらあの平成10年のときと同じようなことになるかもしれない、なってもおかしくないような場だよねと、場ってというのは、天気図の形だとか、それから地面のほうから上のほうまでの空気の湿り具合とか、空気の流れ具合とか、おおまかにはそういうことだと思って頂ければいいのですが、それらがすごく似てるということを現場では話していたのだそうです。でも似ているからって、必ずしもあんな強とは限らないってところがある。

それで、やっぱり実況をよく監視していくってことが大事になってきます。さきほど、時間を追って天気予報を見せていただいて、改めて思うのは、雨の予想、水色のがモワモワって出る画面がありましたが、あれは降水短時間予報というものを基にした絵だと思うんですけども、それを見てもあんな強

い雨雲があそこに停滞するということは表現しきれていない。だから見方にもよるのでしょうけど、やっぱりああいう現象は、数値予報のモデルでも不得意な現象だったのかなっていうふうな印象を持っています。

田代：そうですね。経験でも、ああいう特に梅雨前線の大雨に関しては、いわゆるコンピュータの計算よりも、もう今の実況、今のそれを大事にしていけないと。

桜井：後になってからですけども、今、見せていただいたビデオで、もし一つヒントがあるとすれば、一番初めの5時台の天気予報のときに、3時から4時くらいの衛星の画像を映してらっしゃったんですが、あそこにテーピングクラウドが出ていた。だから、もしかしたら、あそこで何か激しい現象が起こっている、それが来たときには何か起こりそうという見当をつけることができる、だけでもそれをどこまで番組で言えるのかというところがおそらく悩ましいのでしょう。

それからもう一つ、天気予報だけを連続して見せていただいて思ったのは、これから午前中にかけてすごく強く降る可能性がありますということは、確かにおっしゃっていた。もし付け加えるならば、この雨雲の位置はほとんど停滞しています、あるいは東西には動いているけれども南北には動いてませんというようなこと、進行方向に山があるのでなかなか進めないようなことを伝えられればよかったのか、と感じました。でもそれはきっと、気象庁からの情報の中にも、そういうことは、はっきりとそんなふうな書き方は、あのころたぶんしていなかったのだと思います。

桜井：それから、さきほど土砂災害の話がTBSの方から出たんですけど、「過去数年で最も土砂災害の危険性が高くなっています」というのは、いつからでしたか、平成11、2年のころから始めたと思うんですけど、そのこととは別に、今年の3月に気象庁が発表する警報とか注意報のフォーマットを、ちょっとマイナーチェンジしました。警報とか注意報は全部、見出し文って言ったり、注意警戒文って言ったりするんですけど、冒頭に二重括弧でくくって100文字以内で予報官が一番言いたいことを、頑張って表現するっていう部分があるんですが、そのところに、大雨警報が出ているときに、その二重括弧の冒頭に、「重要変更！」というのを付ける仕様を追加しまして、その「重要変更！」が付いた後には必ず「過去数年で最も土砂災害の危険性が高まっています」というキーワードが続きます。さらにその「過去数年で最も・・・」っていうのの前に、できるだけ地域を絞り込みましょうということで、できれば、例えば東京だったら「町田市、八王子市では過去数年で最も・・・」、あるいは「東京都23区東部では過去数年で最も・・・」というふうに、せめて二次細分予報区の単位で、そういう表現を付けて注意警戒を呼びかけるようにしています。

では、何でその判断をしているかっていうと、土壌雨量指数っていう指標を、

これは、地面にたまっている水がどのくらいあるかとか、今どのくらい雨降ってきたかという、そういうことを指標にしたものですがこれを元にして、土砂災害の危険性を呼びかけるようにしています。

それから洪水については、お気づきの方もたくさんいらっしゃると思いますが、気象庁が発表する洪水注意報とか洪水警報っていうものと、国土交通省の河川局の事務所ですとか、それから最近平成13年に水防法改正になりまして、都道府県ともいっしょに洪水予報ができるようになりまして、何とか川洪水予報第何号っていう名前で、ある川のあらかじめ決められた区間を指定して、そこに対して発表する洪水予報と2つがあります。

何とか川と付かない方、気象庁が単独で発表している洪水注意報とか洪水警報は、ある地域を対象にして発表していますので、その地域に流れている川は、大きい小さいの、いろいろあるんだけど、洪水の心配が出てきてますよっていうことをお知らせするものです。

それから何とか川って付く方は、例えば東京ですと、「多摩川洪水予報」のようなタイトルで、多摩川洪水予報第1号で多摩川に洪水注意報を発表します、あるいは多摩川に洪水警報を発表しますというふうな言い方で発表します。この場合は、上流から下流まで多摩川の全ての区間ではなく、あらかじめ決められた区間に対して発表するっていうようなことをしています。このような何とか川とつく方の洪水予報、最近では、NHKさんだけじゃなくて、民間の放送局さんでも、かなり採り上げてくださるようになってきました。大きな川については、ほとんどがすでにこの洪水予報の対象として指定をされていますから、新潟県の場合では、信濃川とか阿賀野川とか関川とか、荒川っていうのもあるのかな、そういうのは指定になっています。でも、残念ながら今回破堤をした五十嵐川とか刈谷田川っていうのは、新潟県が管理をしまして、その川についての洪水予報は、まだ始まっていませんでした。

それでも、知事が管理している河川についても洪水予報の河川として、この川、この川っていうふうに指定して洪水予報をやっていこうね、という動きは進んではいるんです。けれども、じゃあそれをどうやって伝えようかというときに、利根川で洪水予報が出ました、小貝川でも出ました、渡良瀬川でも出ましたっていうことを一本一本言っていくのは、多分現在のテレビの仕組みのままでは大変だと思うし、テロップで出していったとしても、利根川なんかは有名ですから何となくどのへんがかおわかり頂けるかも知れませんが、それでも上流から下流まで非常に長いので、いっぺんに長い区間全部が危なくなるわけじゃなくて、普通は上から順番に危なくなっていくわけですよ。

そうすると、この間の台風の時でもそうですけど、利根川上流部としてあらかじめ決めた区間にまず洪水注意報が出て、半日か1日くらいしてから、今

度は利根川下流部として決めた区間の方が危なくなるっていうふうにしますから、そうすると利根川上流部とか下流部などと言葉で言ったり文字で書いたりするよりは、関東平野の絵をバツと出して、それで都道府県の境があって、川が流れてて、今洪水予報が出ているところはここですっていうのを、赤くしちゃうとか、黄色くしちゃうとか、そういう表現の仕方のほうが、多分伝わりやすいんだらうなって思います。

それで、国土交通省の河川局が管理している川の防災情報っていうホームページを見ると、水防警報の発表状況はすでにそういう図による表現の仕方になってるんですね。今度大雨になったときになって縁起でもないんですけど、まあ、そういうときにでも見て頂けると分かると思うんですけど。だからやっぱり、ああいうふうにちゃんと絵でも分かるようになっていうことを考えると、デジタル放送は、すごく何かいいふうに使えかなと、まだイメージですけど、そんなふうな印象を持っています。だいたいそんなところで、とりあえずいいでしょうか。

藤 吉： ありがとうございます。気象情報、あるいは河川情報のここ数年来の、めざましい情報サービスの向上というのがあると思いますし、これからやろうと思っておられることを全部、放送局の方がそれに応じられるかというようなので、そういう計画をやっておられますので、また機会を改めてお話をするような場を作りたいと思います。

大幅に時間をオーバーしてしまったので、途中ですけれども、これで今日は終わりにしたいと思います。明日からの学会の準備をしている事務局の皆さんとも同じ所へ行きますけれども、これから廣井先生の行きつけのお店の方へ場所を移して、あとご懇談ください。どうも、長時間どうもありがとうございました。

(録音終了)